

区民企画運営講座「こうなんの歴史」

2008年12月20日(土) 10時から

於 天神山 貞昌院 客殿

テーマ 永野地域の歴史と貞昌院の文化財

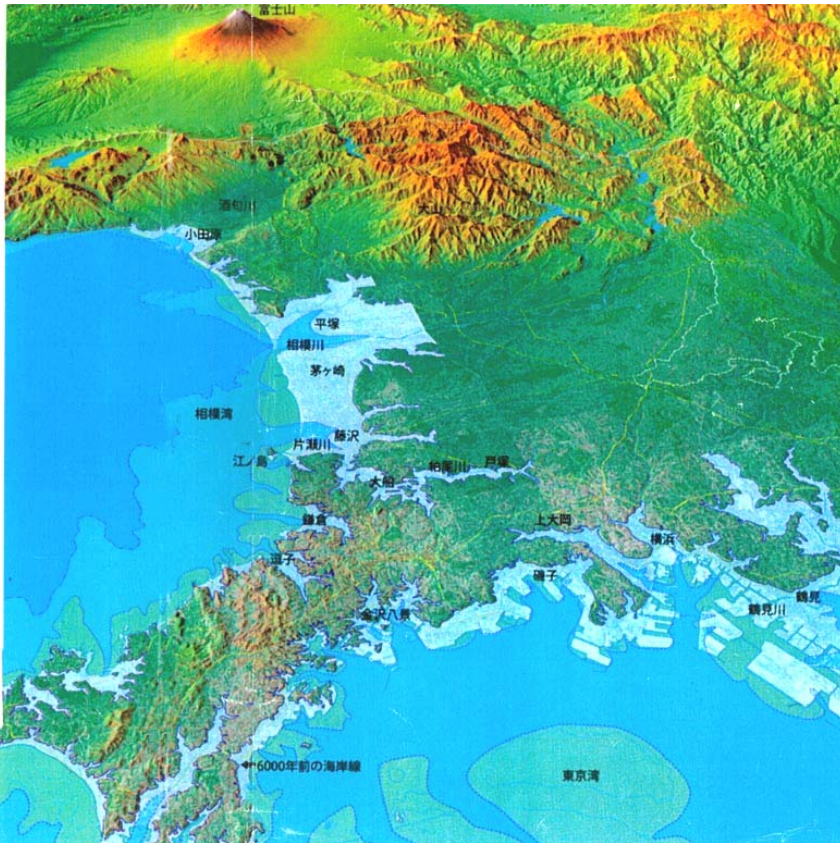
1. 永野地区の歴史

- ・ 古代～
- ・ 武相国境
- ・ かまくら古道

2. 貞昌院の歴史と文化財

3. 貞昌院見学

4. 皆さんからの「声」



6000 年前の海岸線（薄い青は現在の海岸線）

■ 古代

寒冷期もすぎ氷河が溶けだす洪積世の終わりごろの永野は海進、海退によって見えかくれしていた陸地が、地殻の隆起と火山灰の堆積とでできた陸丘がはげしく浸食されて谷をつくり、丘陵を形成します。多摩丘陵からのびひろがる低丘陵の最南端に永野が位置していますが、その主陵は武相境で、大岡川をはさんで三浦丘陵に続いています。上永谷中里丘陵の基盤の屏風が浦層からは暖流性のハイガイや、ウミニナ、ホトトギスガイ、シズクガイ、ユウシオガイ、ブドウガイなどの貝化石が約20種類ほど出ています。



図5 縄文時代ならびに弥生時代の遺跡分布図

表2 南関東における縄文式土器の編年と永野地区のおもな遺跡の出土状況

年代時 B. C 期	遺跡名 型式	西洗台	伊勢山	天矢台	丸山(A)	有華寺台	おぼご台	そとごう
		(上野庭)	坂 (下野庭)	口 (下野庭)	(上永谷)	(下永谷)	(芹が谷)	(上柏尾) (下永谷 の一部)
7000 期 早	(隆起線文式) (爪形捺文式) (井草・島荷浦) 大平	●	●					
	三田戸 田戸 子母 茅山	●	●			●	●	●
3000 期 前	花二積 間つ水 黒山 諸浜 諸磯 磯磯磯	●	●				●	●
	五領が台 阿勝玉 加層利 加層利 加層利	●	●	●	●	●	●	●
2500 期 中	五領が台 阿勝玉 加層利 加層利 加層利	●	●	●	●	●	●	●
	称堀加 堀加 加層利 加層利 安行	●	●			●	●	●
1000 期 後	称堀加 堀加 加層利 加層利 安行	●	●			●	●	●
	安行 安行 安行 安行 安行	●	●			●	●	●
300 期 晩	安行 安行 安行 安行 安行	●	●			●	●	●
	安行 安行 安行 安行 安行	●	●			●	●	●



(貞昌院裏山から出た二枚貝・亀野撮影)

■縄文～弥生時代

弥生遺跡は立地条件から縄文期の遺跡に含まれている場合も多く、西洗、坂口、丸山、丈の台、渡戸、日影山などの谷戸田に面した段丘に土器片が散布しており、各所で農耕生活が営まれていたであろうと推測される。永野には貝塚は存在しないが、黒曜石の矢鏃数個と凹石、縦形石七、砥石、打製・磨製石斧が出土している。

■古墳時代

土師器が分布しているところは、上永谷赤坂付近、中里、有華寺台、芹が谷日影山などに縄文・弥生式土器片に混じって散見されています。永野では大規模の古墳は見受けられませんが、円墳とみなされる〇〇塚という名称でよばれている墳丘の塚は各所に存在し、あるものはすでに開発によって潰滅してしまったものや、中世または近世による経塚や信仰の塚に対比される塚もあると考えられますが、後世になって伝説化されたと思われる塚などもあります。

■武相国境

港南区は東半分を武蔵国、西半分が相模国である。

その境は分水嶺（＝山稜線） 「水流れる境」『新編武蔵風土記稿』

東側に降った雨は大岡川⇒東京湾へ、西側に降った雨は柏尾川⇒相模湾へ

大和朝廷の勢力が鉄器文明を広めながら通過した動脈路（鍛冶ヶ谷、たたら場）

■文化の差異

【武蔵側】

「久保村：東西七丁、南北三丁許、東は大岡川 を限て対岸は上大岡村、西南は斜に松本村にして西は相模国鎌倉郡永谷上村、北は最戸村 に接す、地形は西の方すべて山にして相武国界なり....民戸三十四軒、東北の方最戸村より 西の方松本村に達する一條の往還は前村にいへる金沢及び鎌倉への道なり幅五六尺或いは 八九尺に至る村内を径ること四丁許」『新編武蔵国風土記稿』

武蔵側には刻像型の道祖神が一体も見られない。中世には、鎌倉から見て鬼門（東北）の方角にあたり、そのために寺社が多く建立された。

墳墓（やぐら）の北限。

近世には江戸広域文化圏に包括される。

武蔵国久良岐郡（大岡川村、日下村）⇒昭和 2 年横浜市(中区)に編入。

【相模側】

相模側双体道祖神、相模型道祖神の北限。 写真は般若寺のはらみ道祖神⇒鎌倉郡（永野村）⇒昭和 11 年横浜市（中区）に編入。



■新編相模風土記に見る永野

1 野庭（能婆）下野庭一村此郷名を唱ふ、按ずるに今上野庭村永谷郷を唱ふるは誤なるべし、天文十八年の文書（松岡東慶寺蔵）に野庭と記し、北条役帳に野菜に作る皆当時の偶記なり

2 永谷（奈加也）管する村十二（永谷上、永谷下、上柏尾、下柏尾、平戸、品野、前山田、後山田、秋葉、名瀬、阿久和、上野庭）北条役帳に永谷の名初めて見ゆ郷名に唱へしは古きことにあらず

3 永谷川（馬洗川）

戸部川（登辺可波）（馬洗川、永谷川、赤関川、柏尾川、小館川附）源下野庭村より起り永谷上村に至り、馬洗川と呼び上柏尾、下柏尾、名瀬三村にては永谷川或は赤関川とも称す寺田町以下九村（矢部町戸塚宿上倉田下倉田長沼金井田谷飯島長尾台）に至りては柏尾川と唱へ岡本村にて始めて此川名を得流未十一村（岡本笠間大船小袋谷台山崎植木高谷上町谷宮の前小塚）戸部川と称す、又小館川と唱ふる村四（梶原村にて此川名起る笛田寺分弥勤寺）あり、末は川名弥勤寺二村の境にて境川に合す（幅六尺より末は十間許に及ぶ）此水流を以て田間に沃ぎ水田を耕植する村許多あり（永谷上永谷中戸塚宿三ヶ町長沼上倉田下倉田下倉田上柏尾下柏尾関谷岡本植木前山田十四村なり）水防堤を設く（高七尺より二丈）

4 鎌倉古道、小菅谷村本郷六村の一なり、鎌倉道西南の方を通ず（幅二間より二間半に至る、又古道と称するあり、南方笠間村界にて今の道より北に折れ村の中央を貫き永谷村に達す幅六尺より九尺に至る、按ずるに正保の国図には此道を本道とす）

5 永谷上村（奈我也加美牟良）江戸より行程十里、永谷郷に属す、小田原北条氏割拠の頃は宅間伊織綱頼知行す（役帳曰「宅間殿二百五十貫文、東郡永谷普請役は有之出銭其外御用時は以御直書可被仰出」又村内天神社縁起に天文十二年領主宅間伊織藤原綱頼社頭を再建せし事見ゆ）蜷川相模守親文が采地なり（昔は松平大和守、山田立長、鈴木隼人、蜂屋七兵衛等知行せしが文化八年松平肥後守容衆領分となり、文政四年今の地頭に賜ふ）民戸五十、天正十四年十二月藍瓶の税務を諸村に課せし文書に永谷の名見えたり（足柄下郡板橋村京紺屋藤兵衛蔵文書曰「前岡永谷右之在所不入与申紺屋不出候由、曲事に堅申付可取、若猶兎角申不出候はば可申上他郷へ越し候共、其在所迄ただし、役口可取者也仍如件、丙戌十二月廿五日、京紺屋津田、虎朱印、江雲奉之」とあり）同十九年彦坂小刑部元正検地の後、今に至りて其の法に随ふ、旧は当村上中下三分の別称ありしなるべし中古中分の地を分ちて別村を建つ是今の中村なり、今当村内を区別して、上分下分の別称あるは共遺れるなりされば中村の地当村と一区たりし故地形大牙して広袤四隣共に弁別しがたし故に爰に括載す

広二十町表三十町（南上下野庭小菅谷三村、西舞岡上下柏尾三村、北平戸村及び武州久良岐郡引越別所二村、東同郡望松本久保別所三村）飛地四町四畝平戸村小名伊予殿根（昔天神神職、伊予と云ふもの居住せし跡なれば此称ありと云ふ）有花寺（宇計慈地藏院の所在なり）半在家、丸山、中里、天神前、木曾、水田、鍋谷、宮田、山谷、馬洗川南北に貫けり（幅三間元禄国図にも馬洗川と載す、鎌倉古路係りし頃此流にて馬を洗ひしより此名ありと伝ふ）橋を架す（長三間半）有花寺橋といふ

■かまくら古道

頼朝により整備され、平常時は流通の経路として、また、「いざ鎌倉」として整備された。「鎌倉道」「鎌倉街道」とも呼ばれる。低地を避け尾根伝えの道を、しかも最短になるよう結ぶ。幅は6～9尺程の広い道。

上之道（上路）：武蔵府中-関戸-藤沢-鎌倉

新田義貞の鎌倉攻め進撃路

中之路（中路）：武蔵府中-鶴ヶ峰-名瀬-小菅谷-駒川-鎌倉

頼朝が奥州平泉侵攻の際通過

・畠山重忠滅亡の地

下之道（下路）：下総、上総-浅草-鶴見-保土ヶ谷-弘明寺-餅井坂-大久保-馬洗橋-日限山-

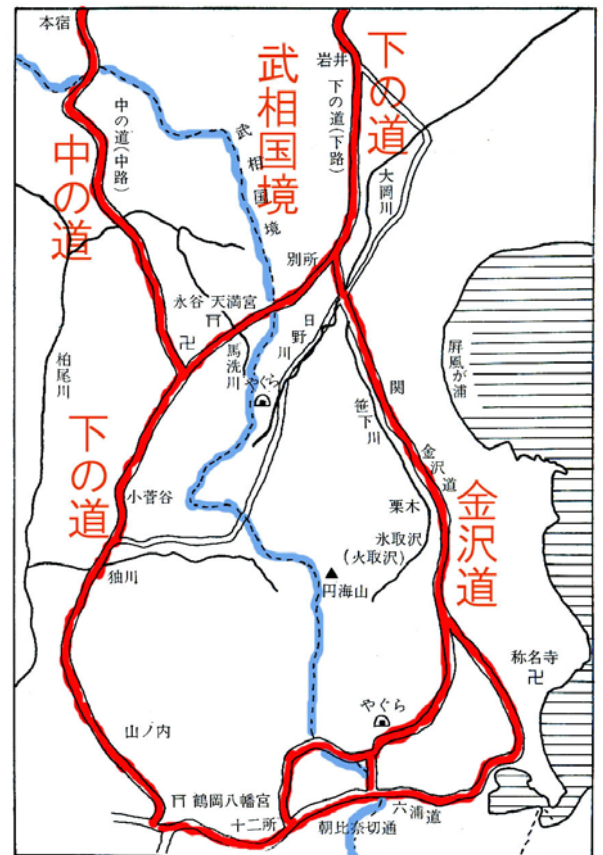
そこで中之道と合流

「鎌倉古道、小菅谷村本郷六村の一なり、鎌倉道西南の方を通ず（幅二間より二間半に至る、又古道と称するあり、南方笠間村界にて今の道より北に折れ村の中央を貫き永谷村に達す幅六尺より九尺に至る、按ずるに正保の国図には此道を本道とす）」

『新編武蔵国風土記稿』

政子が馬を洗ったとされる馬洗橋「馬洗川南北に貫けり、幅三間、元禄国図にも馬洗川と載す。鎌倉古路係りし頃此流れにて馬を洗いしにより此名ありと云ふ」『新編相模風土記稿』

頼朝・政子の祈願所としての弘明寺、尼将軍自刻座像を祀る乗蓮寺、岩難坂の正子の井戸



早駆けの道 鎌倉武士が「いざ鎌倉」のとき、馬で鎌倉へ駆けつけるための道。

下永谷-日限山-舞岡-小菅ヶ谷-笠間-常楽寺-小袋谷-鎌倉

七里堀（武相国境沿の道）「山堺に七里堀と云ありここ爰より吉原、松本、久保、最戸、別所、中里の六ヶ村を経て引越村（六ッ川）に通じる里程七里許を以て七里堀と唱ふ。この古道はかまくら海道なりしか東海道開けてよりこの道は廃し、今は小径残れり、……」『新編武蔵風土記稿』

港南区内の石造物(石塔)

(1) 形態・信仰による分類

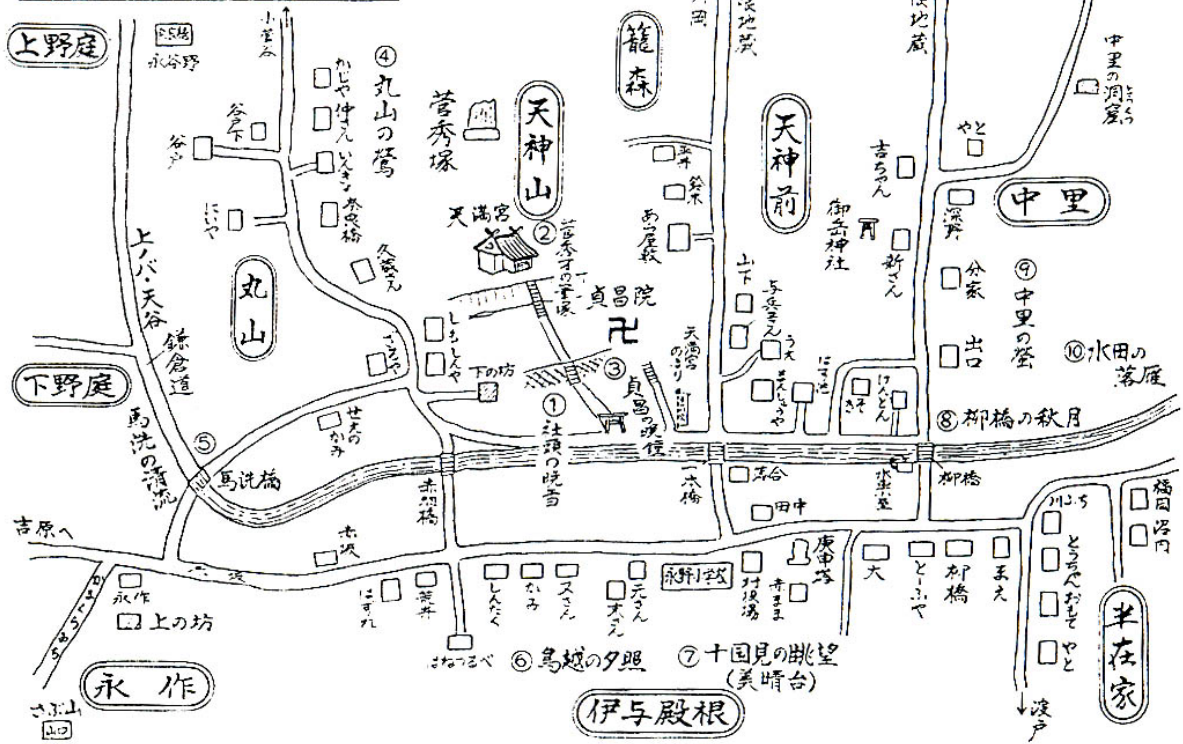
【形態】 宝塔、宝篋印塔、五輪塔、燈籠、層塔、板碑、磨崖仏、石祠、顕彰碑、記念碑、道標

【信仰】 庚申塔、地神塔、道祖神、供養塔（出羽三山講供養塔、木曾御岳講供養塔、富士講供養塔）、日・月待塔、念仏塔（百万遍念仏塔、寒念仏塔）、無縁塔、鳥居

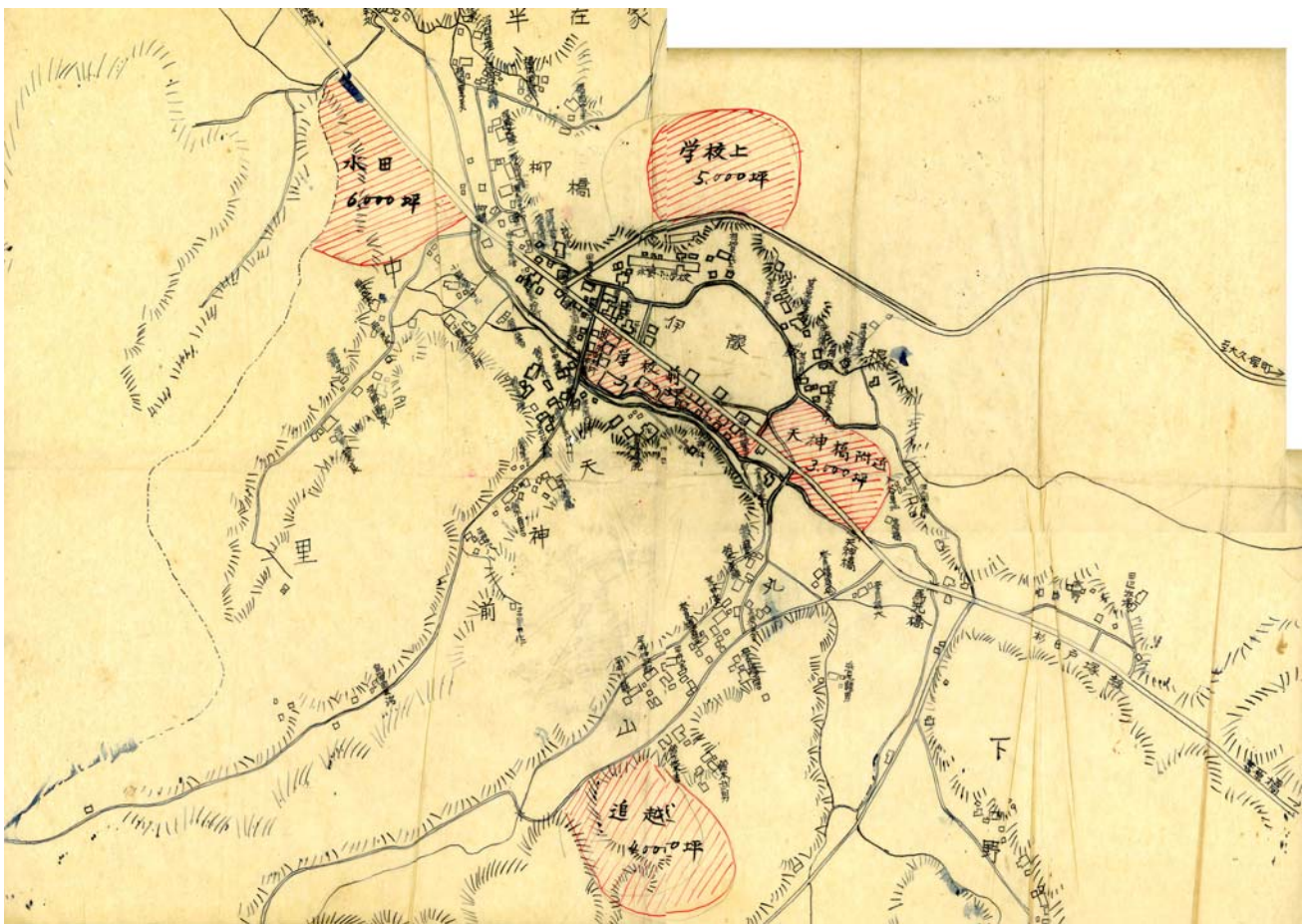
■港南区の主要な歴史年表 (江戸時代以降：参考・横浜市港南区役所ふるさとこうなん)

江戸時代	現在の港南区の地域は、武蔵国久良岐郡に属する上大岡・雑色・関・松本・最戸・久保・宮ヶ谷・宮下・金井・吉原の各村と、相模国鎌倉郡に属する永谷上・永谷中・上野庭・下野庭の各村からなっていた。
明治初期	永谷上村と永谷中村が合併して永谷村に。
1872年(明治5年)	雑色・関・松本の3か村が合併して笹下村に、宮ヶ谷・宮下・金井・吉原の4か村が合併して日野村に。
1873年(明治6年)	日野小学校の創立
1878年(明治11年)	笹下の東樹院隣接地に久良岐郡役所を開設。
1889年(明治22年)	笹下村と日野村が合併して日下村に、上大岡村・最戸村・久保村の3か村が合併して大岡川村に、鎌倉郡の各村が合併して永野村に。
1913年(大正2年)	町に電灯がつき始める。
1920年(大正9年)	上大岡駅前の鎌倉街道沿いに水道が敷かれる。
1923年(大正12年)	関東大震災で大きな被害を受ける。
1927年(昭和2年)	第3次市域拡張で、久良岐郡日下村・大岡川村が横浜市に編入。区制施行に伴い、日下村・大岡川村は中区に編入。中区上大岡町・笹下町・日野町・最戸町・大久保町と改称。
1929年(昭和4年)	弘明寺～日野町間に市営バスが運転開始。
1930年(昭和5年)	湘南電気自動車(現：京浜急行電鉄)が黄金町～浦賀間に開通。上大岡駅開設。(戦後には闇市から発展した箱根通りが駅から続いていた)
1933年(昭和8年)	日野共葬墓地(現：日野公園墓地)開設
1936年(昭和11年)	横浜刑務所が根岸から現在地(港南四丁目)に移転。市域拡張で、鎌倉郡永野村は中区に編入。中区上永谷町・下永谷町・野庭町と改称。
1943年(昭和18年)	中区の一部56か町の区域をもって南区を新設。
1945年(昭和20年)	横浜大空襲(港南区は空襲を免れる)
1950年(昭和25年)	南区役所港南出張所開設(管轄内の世帯数3,990戸、人口19,748人)
1953年(昭和28年)	神奈川県戦没者慰霊堂、講和条約締結記念事業として建立。
1957年(昭和32年)	市営バスが野庭口～横浜間を運行。
1969年(昭和44年)	南区の一部8か町の区域により港南区を新設。(管轄内の世帯数25,928戸、人口95,545人)。
1970年(昭和45年)	人口10万人突破
1971年(昭和46年)	港南区総合庁舎落成港南保健所・港南消防署・港南公会堂(11月)開設
1972年(昭和47年)	横浜市高速鉄道1号線(市営地下鉄)が上大岡～伊勢佐木長者町に開通。
1973年(昭和48年)	国鉄(現：JR)根岸線全線開通、港南台駅開設 開業当時の港南台駅。乗降客数はまだ1日1,300人そこそこ。ブルドーザーが砂ぼこりを巻き上げ行き交う砂漠のような荒野にポツンと駅舎があった。市住宅供給公社野庭団地入居開始
1974年(昭和49年)	環境事業局港南工場と余熱利用施設(港南プール・蓬莱荘)完成 住宅地周辺のゴミ処理工場。公害防止設備はもちろん、煙突を灯台型にし、街並みとの調和を図った。日本住宅公団港南台団地入居開始。
1975年(昭和50年)	人口15万人突破
1976年(昭和51年)	市営地下鉄(上大岡～上永谷)が延伸、港南中央駅・上永谷駅開設。
1979年(昭和54年)	区制10周年記念式典区の花に「ひまわり・ききょう・あじさい」を制定。横浜横須賀道路の一部開通
1980年(昭和55年)	上大岡駅前にバスターミナルが完成。
1984年(昭和59年)	人口20万人突破
1992年(平成4年)	港南台地区センター開館、港南台駅プロムナードに彫刻設置。
1994年(平成6年)	区制25周年。区のシンボルマーク・鳥(シジュウカラ)・木(クロガネモチ)を制定。
1998年(平成10年)	環状2号線暫定開通港南ひまわりトンネル(市内最長547m)開通
2009年(平成21年)	区制40周年

昭和初期上永谷部落



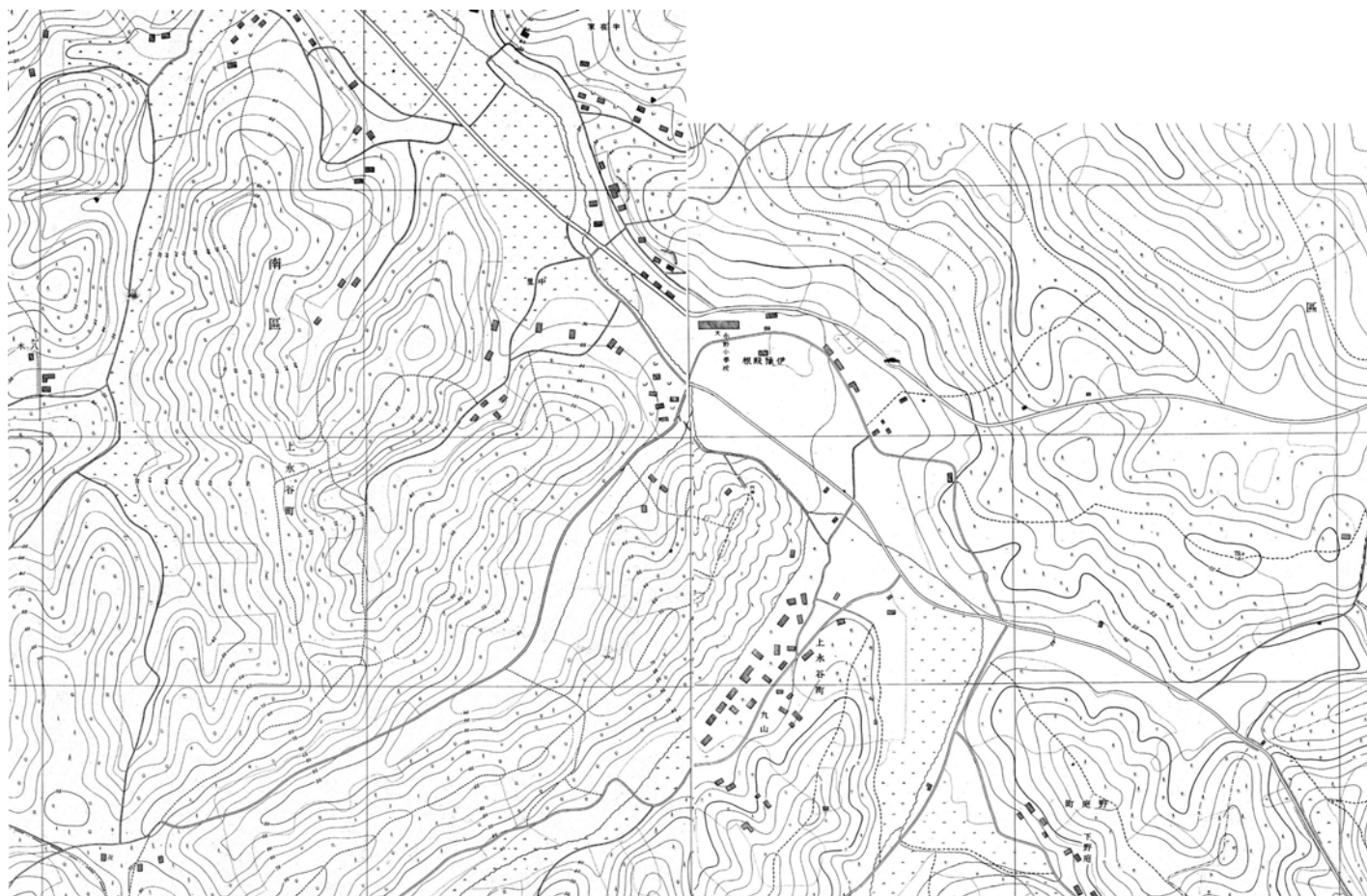
昭和初期の上永谷『天神さまと梅』



戦前の上永谷（貞昌院先代住職による絵図）より



第一軍管区地方 2 万分 1 迅速測図 (明治初期) 赤は現在の幹線道路



横浜市三千分一地形図 (昭和 22 年)



横浜市三千分一地形図 (昭和 38 年)

■永谷天満宮と貞昌院

菅原道真、宝鏡に向ひ躬づから模刻して令子敦茂に興へられし真像なりとぞ、後菅原文時藤原道長上杉金吾等相伝せしを明応二年二月当所の領主藤原乗国（当国八郷を領し永谷郷に居城せしと云ふ）靈夢の告により此地に始て宮社を営み安置すと云ふ、其後天文十二年領主宅間伊織綱頼修造を加へ天正十年同氏規富再造せしとなり。末社妙義白山。妙見。稻荷。別当貞昌院、天神山と号す、曹洞宗（後山田村徳翁寺未）。旧は上之坊下之坊と号せし台家の供僧二字在りしが共に廃亡せしを天正十年に至り、其廢跡を開き、当院を起立す、開祖は文龍（天正十九年四月十六日寂す）と云ふ、本尊は十一面観音（長八寸行基作）。神明宮二、羽黒社、浅間社、以上貞昌院持」

『新編相模風土記』より引用

「上之坊は上永谷町5358番地附近一帯、現、田辺氏宅東方地域、下之坊は上永谷町3400番地附近一帯、現、鈴木氏宅西方の山腹、故に鈴木家を寺下と呼称す、両坊共に七堂伽藍を具備せしと」

『永野郷土史』

上之坊、下之坊どちらも七堂伽藍を具備していたという記述により、相当の大伽藍であったことが推測される。

「伽藍を構成する主な建物として、俗世間との境界を示す山門、本尊を祀る本堂、塔、学習の場である講堂、僧の住居である庫裏、食堂（じきどう）、鐘楼、東司（とうす）などがある。これらの要素の配置や数は宗派、時代によって異なる。その多くを擁する大寺院は七堂伽藍と呼ばれる。七堂伽藍が何を指すかもまた時代や宗派によってまちまちだが、鎌倉時代の『古今目録抄』では金堂、塔、講堂、鐘楼、経蔵、僧坊、食堂となっており、これが一般的に知られている。ただし禅宗で七堂伽藍というと、山門、仏殿、法堂（はつどう）、僧堂、庫院（くいん）、東司（または西浄〈せいちん〉）、浴室とされる。」

禅宗様式でいう七堂伽藍は、山門、仏殿、法堂、僧堂、庫院、東司、浴司ですが、当時は天台宗であったはずですので、金堂、塔、講堂、鐘楼、経蔵、僧坊、食堂のことを指したと推測されます。

（参考：『古今目録抄』）


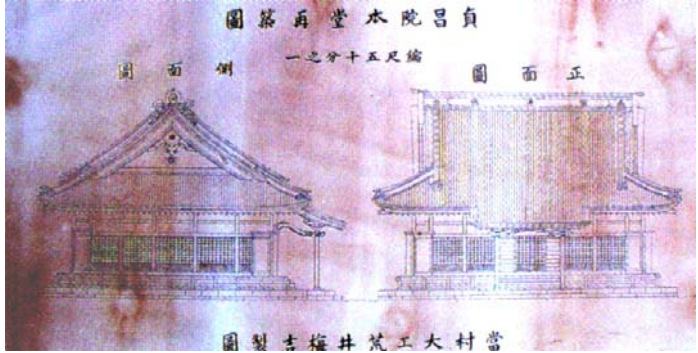
<p>禅宗伽藍配置の例<瑞龍寺> A:総門 B:山門 C:回廊 D:仏殿 E:法堂 F:禅堂 G:鐘楼 H:大庫裏</p>	<p>薬師寺伽藍配置 A:中門 B:回廊 C:金堂 D:塔 E:講堂 F:鐘楼 G:経蔵</p>

「上之坊」「下之坊」は一時廃寺となるが、天正 10 年(1582 年)に当時の領主であった宅間伊織綱頼修造および宅間藤原規富により曹洞宗寺院として再建される。

(開山 戸塚・後山田村の徳翁寺第四世・明堂文龍大和尚)

開創当時は天神社と山を挟んだ位置(下之坊=現在の京急メモリアル付近)にあったが、文化 14 年(1817 年)に、現在の位置である永谷天満宮の隣に移転された。

移転した当初の伽藍配置は絵地図として残されている。

	
<p>江戸時代は茅葺屋根の本堂でしたが、明治 19 年(1886 年)の火災(明治 34 年再建) 関東大震災により倒壊の被害に遭います。</p>	<p>関東大震災翌年には茅葺から垂鉛葺きの本堂として再建。</p>



昭和初期に撮影された貴重な写真。

永谷川の対岸から貞昌院を撮影したものである。

左に永谷天満宮の鳥居、中央に山門、その奥に鐘楼堂、垂鉛葺本堂、右に庫裏の屋根が見える。

貞昌院境内の 2 本の銀杏の木は、この写真ではまだ樹高数メートルしかない。

鳥居の奥、ひときわ大きな杉の木は永谷天満宮の御神木の杉。

落雷や環境の変化により、昭和 49 年に地上 2 メートルの位置で伐採され、現在は切株は銅板で覆われている。

■永谷地区の小学校

明治 6 年(1873) 日野小学校創立。

明治 10 年(1877)、野庭学校創立。(現在の常念寺付近)。

明治 12 年(1879)、永谷学校創立。字八木 2690 番地(現在の下永谷 3 丁目 27)。

明治 22 年(1889)、町村制が執行され、永谷、上野庭、下野庭の 3 村が合併して永野村となる。

永谷学校と野庭学校が併合、永野学校(本校)、野庭学校(分校)。

明治 24 年(1891)、小学校設備準則により永谷学校が現在の永野小学校の位置に移転。

明治 25 年(1892)、野庭学校が村役場として永谷学校の隣に役所として移転。

■永谷学校と勝海舟の書

慶応 4 年(明治元年)徳川慶喜の家臣、陸軍総裁勝安房(海舟)の手下、平野玉城が朝廷方官軍に追われたところを、下永谷で醤油醸造を行っていた福本宅にて助けられる。

明治 9 年、一命を助けられた平野は、命の恩人福本興四郎宅を再び訪れた。その際村人よりに当地に滞在するよう懇願された。

明治 10 年、村民に推されて棲心庵学舎に第三級訓導として教職に就く。氏が就任するや入学者が殺到し、庵が手狭になった。

明治 12 年、水田の権田ヶ谷戸に永谷学校が新築された。平野はその落成記念にかつての師、勝海舟に「永谷学校」の書をお願いし快諾の上贈与された。現在は永野小に保存。

明治 24 年、平野は鎌倉の長谷にて死去。七回忌の時、子息平野直吉(第一代永野小学校長)より玉城の分骨を得、貞昌院墓地に埋葬。

明治 36 年、氏の徳を慕う人々により、十三回忌が盛大に行われた。列席した直吉は感激し、貞昌院 28 世住職・亀野源量和尚に勝海舟の書「眠雲」を記念として贈呈された。現在その書は貞昌院の寺宝となっている。

■貞昌院の由緒縁起

貞昌院の前身は、天性院と称した天台宗の宿坊。(上之坊、下之坊)

足利時代に廃絶。下之坊には菅原道真四男、管秀才淳茂が起居、道真自刻の尊像を奉祀して朝夕崇拝したのが、天神社(永谷天満宮)となる。

天正 10 年(1582 年)宅間藤原規富が天神社を再建するにあたり、川上・徳翁寺四世住職明堂文龍大和尚を請し、籠森に貞昌院を建立。天神社の別当となった。

文化 14 年(1817 年)、天神社と山を挟んだ位置から永谷天満宮の隣に移転。

明治 19 年(1886 年)の火災により、堂宇が消失。本尊十一面観世音菩薩像と欄間彫刻などは、近隣檀家の方々によって無事搬出され、山門、鐘楼なども難を逃れた。

明治 34 年(1901 年)、第 28 世無外源量大和尚代に諸堂が再建。

関東大震災による倒壊を経、翌年に亜鉛葺きの伽藍として再建。

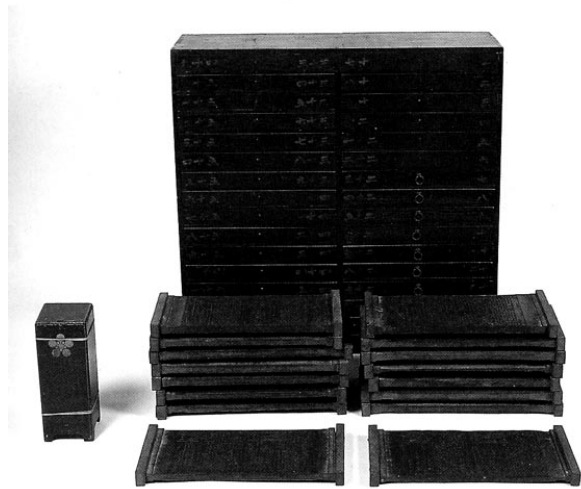
昭和 46 年(1971 年)に、銅版葺となり、現在の姿に改築された。

■貞昌院の主な見どころ

- ・ 欄間の彫刻
- ・ 本尊（十一面観音菩薩）
- ・ 本尊（釈迦牟尼佛）
- ・ 勝海舟の書
- ・ 天神おみくじ
- ・ 天井絵
- ・ 茶室如是庵

そのほかの特徴

- ・ 自然の湧水
- ・ 緑地保存地区
- ・ 太陽光発電



■天神おみくじについて

天神おみくじは、貞昌院に200年前から伝わる、由緒あるおみくじです。

横浜の文化財（横浜市教育委員会編）には、おみくじについて次のような解説があります。

1. 御籤匣

匣は黒漆塗りの直方体で、正面に金地仕上げのうめばちの紋を描き、上端中央に竹簡の籤がでる穴を持つ。裏面には朱の「天神山貞昌院 十四世哲航大賢五修彦命代 江戸中橋 榎町清水舊長門弟中」の銘がある。寸法は巾・奥行 12.2cm、高さ 31cm。

※寛政年間（1789-1800）

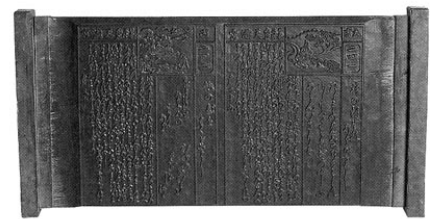
2. 竹簡

竹簡の籤は、平均巾 0.8cm。長さ 18.9cm。上端部に吉凶と三桁の数字番号、下端部に通し番号。

3. 版木

版木は裏表両面に各 2 枚の版を固定したもので、一面で 2 種類の御籤札を刷ることができる組み版となっている。組み合わせは竹簡の番号に準ずる。札一枚の平均的寸法は横 15.5cm、縦 21cm。組み版木の寸法は 46.5cm*24cm である。

（横浜の文化財（横浜市教育委員会編）より抜粋）



194 日本三休水谷天満宮御籤版木
江戸後期
神奈川県／貞昌院蔵

195 日本三休水谷天満宮御籤
神奈川県／貞昌院蔵

右上の渡数字は一から四までの組み合わせで六四種を表すもので、一は「一一」、六四は「四四四」となる。これはもと、一から四までの籤を三度引いて白つた名残りで、さらに古くはサイコロを投げ、天地人、空白の組み合わせで該当する歌を選んだりした。

水谷天満宮の別当であった横浜市の貞昌院に伝わるもの。歌占でもっとも普及した天満宮六十四首歌占と呼ばれるもので、観音籤の一〇〇通りに対し、六四通りである。

おみくじの内容

吉凶・番号 概要 絵 和歌

<本文> 護り本尊・願事・病事・生死・失物・待人・お産・争事・縁談・学問・商売・結文・番号



■江戸中橋正木町について

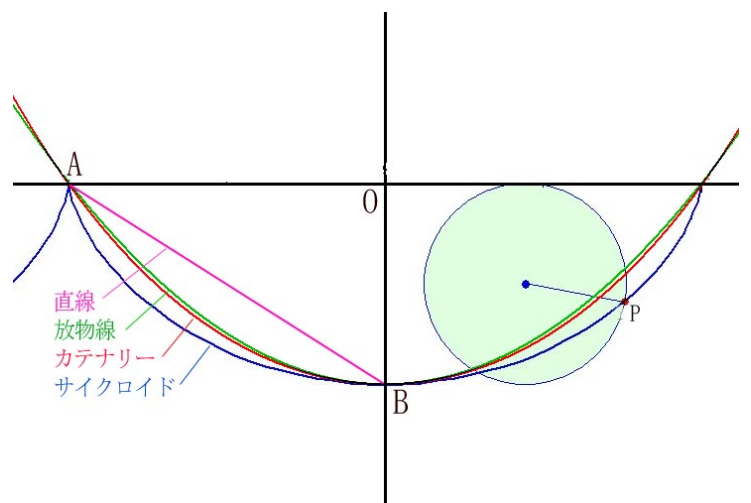
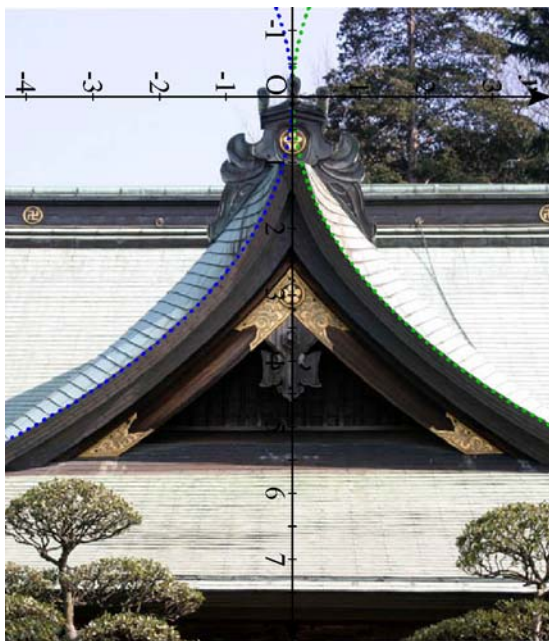
「昔本材木町より東中通に連なる一條の入堀なりしを元禄年間埋築して市街とせし」(『京橋繁盛記』・京橋協会・大正元年)にあるように、正木町は、元禄3(1690)年頃に埋め立てられた土地。

元は江戸城の築城用材木や石材の陸揚げ用の入堀だった。その後、埋め立てて町屋とし、明治2(1869)年4月、南隣の南鞘町に統合された。大鋸町は正木町の西隣と北隣。安藤広重(1797-)の住居や中橋家狩野屋敷があった。

桑名藩主松平越中守の上屋敷は、

楓川(現・首都高速道路)にかかるとる越中橋(現・久安橋)を渡った所。その向こうには八丁堀組屋敷が広がっていた。遠山左衛門尉景元が就任した北町奉行は呉服橋御門内(現・東京駅八重洲北口付近)にあった。

■寺院建築の数学的検証



図：各曲線の特徴

貞昌院の屋根がカタナリー曲線に適合する例

$$y = \pm(\cosh ax - 1)/a \quad a = 0.27$$